『源氏物語』における「ゆかし」の考察(九)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4676

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（九）

北村英子

本稿は『『源氏物語』における「ゆかし」の考察」（八）（「樟蔭国文学」第31号）に続くもので、これが最終稿である。

本論においては、「浮舟」の巻から「夢浮橋」までの、「ゆかし」の用語例をすべて抄出し、考察吟味し、それに加えて「ものゆかし」・「おくゆかし」においても、用語例をすべて抄出し、考察吟味し、「ゆかし」の語との関連性をも究明する。

「浮舟」の巻の用語例を検討していく。

○あやしきさまのやつれ姿して、御馬（むま）にておはする、心地もものの恐ろしくややましけれど、もののゆかしき方は進みたる御心なれば、山深うなるままに、いつしか、いかならん、見あはすることもなくて帰らむこそさうざうしくあやしかるべけれと思すに、心も騒ぎたまふ。法性寺（ほふさうじ）のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬（むま）には奉りける。[1]

「浮舟」の巻の一番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で、匂宮の志向性の強さに対して用いている。

語義を文脈に即して考察すると、「好奇心」と解するのが最も文意に適合する。「匂宮の好奇心は人より並はずれてまさったご性分で、早く宇治の女に会いたい」と、視覚的欲求を強く働かせているのである。匂宮の志向対象は宇治の女に心惹かれる思いで、うきうきした落ち着かない陽性心情が昂揚しているのである。

次の用語例を検討する。

○何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかな、と思ひくらぶるに、心恥づかしげにてあてなるところは、かれはいとこよなし、これは、ただ、らうたげにこまかなるところぞいとをかしき。よろしう、なりあはぬところを見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる人を、それと見てさてやみたまふべき御心ならねば、まして隈（くま）もなく見たまふに、いかでかこれをわがものにはなすべきと、心もそらになりたまひて、なほまもりたまへば、

二番目の用語例は、「ゆかし」と形容詞の終止形で表れ、匂宮の心

中に対して用いている。

語義を文脈に沿って考察すると、「会いたい」と意味付けるのが適切である。匂宮の視覚意識で、その志向対象は浮舟という女性である。「匂宮はまずまずの器量で、どこか不足なところが浮舟の目についたとしても、あれほど会いたいとしみじみと身にしみてお思いになっていらっしゃった女を、これが間違いなくその女だと見届けながら、……」という意味になり、匂宮の心の内には浮舟を思い込んで離れない一念が窺われる。

このようにみてくると、「ゆかし」は「思ししむ」という心の状態を表す語を伴って相互関係を保ちながら、文意を整えているのであるが、匂宮が心中深く浮舟を思う状態が、次の会いたいという視覚意識を誘発しているのである。

次の用語例を考察していく。

○匂宮「いかなる人の心変りを見ならひて」などほほ笑みて、大将のここに渡しはじめたまひけむほどを、かへすがへすゆかしがりたまひて問ひたまふを、苦しがりて、浮舟「え言はぬことを、かうのたまふこそ」と、うち怨じたるさまも若びたり。おのづからそれは聞き出でてむと思すものから、言はせまほしきぞわりなきや。

三番目の用語例は、「ゆかしがり」と動詞の連用形で表れ、匂宮の志向性の強さに対して用いている。

その志向対象は、薫と浮舟の男女に向けられ、薫が宇治に浮舟を連れてきた事情を匂宮は知りたがっているのである。

語義を文脈に即して考察すると、「聞きたがる」と訳しても、「知りたがる」と訳しても文意は通じるが、匂宮の感覚は、まず聴覚的欲求が強く昂揚しているものと思われるところから、「聞きたがる」と語釈するのが適切である。そして「知りたがる」意識が働いていく。このように解して、「ゆかしがる」の箇所を現代語訳しておくと、「薫がこの宇治に浮舟をお連れになったという、そもそもの事情を、かへすがへすお聞きたがりになりたくて、お尋ねになるので、浮舟は困ってしまい」となる。

さて、本用語例の「ゆかしがる」は、薫が宇治に浮舟を連れてきた事実について、その事情を匂宮はまだ知らない事に対する聴覚的欲求で、近い未来に聞いて知る事が出来るであろうという思いを指す。

ここにおいても匂宮の心情をみることが出来る。

次の用語例を検討吟味しよう。

○かくあやしき住まひを、ただかの殿のもてなしたまはむさまをゆかしく待つことにて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまながらも、近く渡してんことを思しなりにければ、いとめやすくうれしかるべきことに思ひて、やうやう人もとめ、童のめやすきなど迎へておこせたまふ。

四番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表れ、「待つ」と共にお互い協調を保ちつつ文意をなす。

語義を考察するにあたり、次の注釈書の「ゆかしく待つ」の解釈を調べると、『新編日本古典文学全集』では、「心待ちにして」と解

されており、『新潮日本古典集成』では、「楽しみに待つ」と解され、『源氏物語評釈』では、「期待する」と解され、それぞれ異なる表現で訳されているが、ここで「ゆかし」本来の意味で考えてみよう。「知りたく（それを）待つことで」と解しても文意は成り立つ。すなわち、「浮舟の母君も、娘がこのようなみすぼらしい住まいをしているけれど、ただあの薫大将殿がどう扱ってくださるかを、知りたく（それを）待つことで、母君も心を慰めていたところへ、表立ったお扱いではないにせよ、浮舟を近い所へ引き取ろうという気持になったので…」と現代語訳出来、「ゆかし」は近未来その事が期待に沿うよう実現可能となるであろう事を示唆している。浮舟の母君の落ち着かない陽性心情が昂揚しているのである。

次の用語例の検討に移る。

○親もいと恋しく、例は、ことに思ひ出でぬはらからの醜やかなるも恋し。宮の上を思ひ出できこゆるにも、すべていま一たびゆかしき人多かり。人は、みな、おのおの物染め急ぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず、夜となれば、人に見つけられず出でて行くべき方を思ひまうけつつ、寝られぬままに、心地もあしく、みな違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。

五番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表れ、浮舟の視覚意識が昂揚している場合に用いられている。

浮舟は死を決心すると、「母が恋しくなり、兄弟の醜い顔をしたのも恋しくなり、中君をお思い出し申し上げるにも、すべて今一度会いたい人が多くいる」となり、浮舟の最期の希望で普段は特にそんなに思いもしない人までも、会っておきたいという心情に駆られる。浮舟の落ち着かない願望的心情が昂揚しているのである。従って、この「ゆかし」は問題なく「会いたい」と解すると文意に沿う。

以上、「浮舟」の巻には「ゆかし」の用語例は五例を認めたが、五例中四例が形容詞で、一例が動詞で表れる。形容詞の四例は、連体形が二例、終止形が一例、連用形が一例とさまざまな活用形で表れ、動詞は連用形が用いられている。これらはやはり視覚に関する意義が多く、庇護者的立場にある匂宮が庇護下にある女性浮舟に向けられた視覚的・聴覚的欲求が目立つところである。用語例四に関しては、庇護者的立場にある浮舟の母が、庇護下にある娘浮舟に向けられた好奇心であり、用語例五は浮舟が近親者へ向けられた視覚的欲求であり、五例共浮舟が関係している事になる。

次は「蜻蛉」の巻である。

○兵部卿宮、この君ばかりや、恋しき人に思ひよそへつべきさましたらむ、父親王は兄弟ぞかしなど、例の御心は、人を恋ひたまふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけたまひてけり。

「蜻蛉」の巻の一番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で、匂兵部卿の宮の好奇心に対して用いている。

語義を文脈に即して考察すると、「見たい」と解するのが最も文意に沿う。「匂兵部卿の宮は女なら誰でも見たいというお癖がやまないで」という意味になるが、匂兵部卿の宮の心中には宮の君に好

奇心が働いている。それというのも、宮の君と恋しい浮舟との特性の似通いから両者を重ねて想うところから、宮の君に好奇心が沸き起こる。こういった下心があるのである。要するに男性が女性に対して、視覚的欲求を強く働かせ、うきうきした落ち着かない陽性心情が昂揚しているといえる。

次に用語例を検討していこう。

○宮の歩みおはして、匂宮「これよりあなたに参りつるは誰(た)そ」と問ひたまへば、女房「かの御方の中将の君」と聞こゆなり。なほ、あやしのわざや、誰(たれ)にかと、かりそめにもうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよといとほしく、この宮には、みな目馴(めな)れてのみおぼえたてまつるべかめるも口惜し。

二番目の用語例は、「ゆかしげなく」と形容詞の連用形で、薫の心中思惟の中で批判的意味をもって表れる。

語義を考察するにあたり、次の注釈書の「ゆかしげなく」の解釈を調べると、『新編日本古典文学全集』および『源氏物語評釈』では、「無造作に」と解され、『新潮日本古典集成』では、「あからさまに」と解されているが、「ゆかし」本来のもつ意味を尊重して、「奥ゆかしげもなく」と解し、「薫はやはり、けしからんことよ、あの女は誰だろうかと、かりそめにも気にとめている男に、すぐさまこのように奥ゆかしげもなく名前を申し上げるとは、中将の君が気の毒で、この匂宮に対しては、誰もがなじみにお思い申そうとしているのも残念だ」となり、女房が女の名前を浮気な男に聞かれて、簡単に言ってしまった。その軽はずみな言行に対して、薫は「奥ゆかしげもない」と非難しているのである。従って、薫の落ち着かない陰性心情が昂揚しているのである。

以上、「蜻蛉」の巻には「ゆかし」の用語例は二例である。二例共形容詞で一方は連体形で、一方は連用形で表れる。一番目は匂宮の陽性心情で、二番目は「ゆかしげなく」と否定語として表れ、薫の陰性心情の昂揚を看取するが、対象はいずれも女性が関係している。

次は「手習」の巻である。

○中将「うちつけ心ありて参り来むにだに、山深き道のかごとは聞こえつべし。まして思しよそふらん方につけては、ことごとに隔てたまふまじきことにこそは。いかなる筋に世を恨みたまふ人にか。慰めきこえばや」など、ゆかしげにのたまふ。出でたまふとて、畳紙(たたうがみ)に、

中将あだし野の風になびくな女郎花(をみなへし)われしめ結(ゆ)はん道とほくとも

と書きて、少将の尼して入れたり。

「手習」の巻の一番目の用語例は、「ゆかしげに」と形容動詞の連用形で、中将の好奇心に対して用いている。

語義を文脈に沿って考察すると、「知りたそうに」と語釈すると文脈上意味をなす。「中将はどういうわけでこの世を恨んでいられる人なのでしょうか。お慰め申し上げたく思い、会って聞いて事情を知りたそうにおっしゃるのである」中将の志向対象は浮舟という女性に心惹かれ、落ち着かない陰性心情が昂揚しているのである。

次の用語例を検討吟味していく。

○対面したまへるにも、中将「心苦しきさまにてものしたまふと聞きはべりし人の御上なん、残りゆかしくはべる。何ごとも心にかなはぬ心地のみしはべれば、山住みもしはべらまほしき心ありながら、ゆるいたまふまじき人々に、思ひ障りてなむ過ぐしはべる。世に心地よげなる人の上は、かく屈したる人の心からにや、ふさはしからずなん。もの思ひたまふらん人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心とどめたるさまに語らひたまふ。

二番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で、中将が浮舟に気のあるようなことをしゃべっている、その言葉の中に表れる。

語義を文脈に沿って考察すると、「聞きたく」と語釈するのが最もよく、「お気の毒な様子でいらっしゃると聞きました人のお身の上について、残りが聞きたく存じます」と訳す事が出来、中将の聴覚的意識が沸き起こっている。その志向対象は浮舟という女性に心惹かれ、一途に浮舟のことを聞いて知りたく思っているのである。男性が女性を恋い慕い、うきうきとした落ち着かない陽性心情が昂揚しているのである。

次の用語例に移る。

○中将「かかる所にながめたまふらん心の中のあはれに、おほかたのありさまなども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなしたまふめるこそ。それももの懲りしたまへるか。なほ、いかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、いとゆかしげにのみ思いたれど、こまかなることは、いかでかは言ひ聞かせん、

三番目の用語例は、「ゆかしげに」と形容動詞の連用形で表れ、ここにおいても中将が浮舟に関心をよせる心情に対して用いている。

語義は「知りたそうに」と訳すと、文脈上文意をなす。「中将は浮舟の様子を根ほり葉ほり聞いて、とても事情を知りたそうにばかり思っておられるようであるけれど」となり、中将はやはり一途に浮舟に心惹かれ、浮舟の事を聞いて知りたいのである。中将はなおも浮舟の事が気がかりで心中深く思い続けているのである。

次の用語例を検討する。

○我には、さることなん聞きしと、あるめづらしきことを聞こしめしながら、のたまはせぬにやありけん、宮もかかづらひたまふにては、いみじうあはれと思ひながらも、さらに、やがて亡せにしものと、思ひなしてをやみなん、うつし人になりて、末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづから語らひ寄る風の紛れもありなん、わがものにとり返し見んの心はまたっかはじ、など思ひ乱れて、なほのたまはずやあらんと思へど、御気色のゆかしければ、大宮に、さるべきついでつくり出ててぞ啓したまふ。

四番目の用語例は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で、薫の好奇心に対して用いている。

語義は「知りたいので」と訳すと、文脈上文意が適う。「自分のものに取り戻して会おうという気持はもう起こすまい、などと薫は

思い乱れて、中宮はやはりおっしゃってはくださらないだろうと思うのだけれど、御様子が知りたいので、中宮に、しかるべき機会をつくって申し上げなさる」と現代語訳する事が出来るが、薫は浮舟に対して匂宮がかかわっているかどうか気になって仕方が無い。だから母中宮に匂宮の様子を聞いて知りたく思うのである。薫の志向対象は匂宮と浮舟の仲を気にしているのであるが、特に匂宮の行動に執着し知りたい気持が募り、母中宮に会って聞いて探りたい、そして知りたい意識が昂揚しているのである。そして近未来可能にしたい心情が強く働いていることが窺える。

以上、「手習」の巻には「ゆかし」の用語例は四例見当たる。四例中二例が形容動詞の連用形で、一例が形容詞の連用形で、一例が形容詞の已然形で、すべて男性の好奇心である。その内、中将という男性が浮舟という女性に関心を抱いている場合が三例もあり、中将の好奇心の旺盛さが分かる。あとの一例は薫という男性の好奇心であり、対象は匂宮といえども浮舟が関与しているのである。

次は『源氏物語』の最終巻、「夢浮橋」の巻の終結部分に表れる。

○妹尼「ただ、かく、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふべきなめり。雲の遥かに隔たらぬほどにもはべるめるを、山風吹くとも、またも、かならず立ち寄らせたまひなんかし」と言へば、すずろにる暮らさむもあやしかるべければ、帰りなんとす。人知れずゆかしき御ありさまをもえ見ずなりぬるを、おぼつかなく口惜しくて、心ゆかずながら参りぬ。

「夢浮橋」の巻では、「ゆかし」の用語例は、この一箇所のみに形容詞の連体形で表れる。

語義を文脈に即して考察すると、「会いたい」と語釈するのが最も自然な文意になる。浮舟の弟、小君は小野の山荘に姉に会いに行ったのであるが、結局、姉と対面出来ず帰っていく。という話の終盤部分のキーワードとして「ゆかし」は用いられている。小君は使者としての役目というより、姉と会えるという懐慕の情が心中強く沸き起こり、うきうきとした落ち着かない陽性心情を募らせて目的地に行くが、期待がはずれ一転して陰性心情に急変してしまう小君の心裡の起伏が読み取れる。

このように考察してくると、本用語例中の「ゆかし」は、やはり小君という男性が、女性である姉に対して視覚好奇心が強く働くのである。

さて、用語例考察の最後に、「ものゆかし」・「おくゆかし」についても用語例をすべて抄出し、まとめて検討吟味しておく。

まず、「ものゆかし」の用語例は「野分」の巻に一箇所と「若菜」(下)の巻に二箇所みられる。

「野分」の巻の用語例は次の文面に表れる。

○渡らせたまふとて、人々うちそよめき、几帳ひきなほしなどす。見つる花の顔ども、思ひくらべまほしくて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻びより見れば、物のそばより、ただ這ひわたりたまふほどぞ、ふとうち見えたる。

「野分」の巻では「ものゆかしから（ぬ）」と、接頭語「もの」プラ

ス形容詞の未然形「ゆかしから」プラス打消の助動詞「ぬ」から組成された言葉として表れる。

語義は「見たいとは思われ（ない）」と語釈すると文脈上自然な訳が付く。そして、「明石の姫君が、紫上の方からこちらにお戻りになるというので、女房達がざわつきだし、几帳をなおしたりしている。夕霧は先程見た紫上（樺桜）と玉鬘（八重山吹）を、明石の姫君と比べたくて、いつもは見たいとは思われない心地なのに、今日は無理に妻戸の御簾をひきかぶって、几帳の綻びからのぞくと、明石君は物陰からそっと通ってこられるところがちらっと見えた」と現代語訳出来、まめ男の夕霧の心情は、いつもは明石の姫君に好奇心をもたない場合に「ものゆかしから（ぬ）」という語を用い、男性が女性に向けての心理状態を指す。

次は「若菜」(下)の巻である。

○明石の君「このたびは、かくおほかたの響きに、立ちまじらむもかたはらいたし。もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば」

と、御方はしづめたまひけるを、残りの命うしろめたくて、かつがつ物ゆかしがりて、慕ひ参りたまふなりけり。さるべきにて、もとよりかくにほひたまふ御身どもよりも、いみじかりける契りあらはに思ひ知らるる人の御ありさまなり。

一番目の用語例は、「物ゆかしがり」と動詞の連用形で表れ、尼君の好奇心で志向対象は珍しく男女関係ではなく、参詣の様子を見たいと思っている場合に用いている。

語義は「見たがって」と語釈すると、文脈上自然な訳になる。「尼君は残りの命が気がかりで、ともかくもこの御参詣を見たがって、後について参詣なさるのである」と訳が付く。尼君の参詣の様子に対しての視覚好奇心が強く昂揚しているのである。

○源氏「月たたば、御いそぎ近く、もの騒がしからむに、掻き合はせたまはむ御琴の音も、試楽めきて人言ひなさむを、このごろ静かなるほどに試みたまへ」とて、寝殿に渡したてまつりたまふ。御供に、我も我もとものゆかしがりて、参上らまほしがれど、こなたに遠きをば選りとどめさせたまひて、すこしねびたれど、よしあるかぎり選りてさぶらはせたまふ。

二番目の用語例も、「ものゆかしがり」と動詞の連用形で表れ、女房達の好奇心はお琴の合奏を聞きたがって本殿に参上したく思うのである。

「ものゆかしがり」は「聞きたがって」と語釈すると、文脈上自然な訳になる。女房達が美しい琴の音色に好奇心を募らせ、聴覚的陽性心情を昂揚させているのである。

「若菜」(下)の巻では先に検討してきたように二例共、女性の好奇心で、志向対象は今まで多くみられたような人物ではなく、参詣の様子や美しい琴の音色に心惹かれているのである。

このように考察を進めてくると、「ゆかし」という形容詞に「もの」という接頭語を加え、「ものゆかしがる」という動詞形の造語が文中に登場するようになり、志向対象も人物のみだけでなく広範囲なものに心が向けられるようになる。

次に「ゆかし」に「おく」が加わって、「おくゆかし」という造

語が三例見当たる。その語について検討していく。まず「末摘花」の巻である。

○君は人の御ほどを思せば、されくつがへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆかしと思しわたるに、とかうそそのかされて、ゐざり寄りたまへるけはひしのびやかに、えひの香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、さればよと思す。

この文面中に「奥ゆかし」と形容詞の終止形で表れ、光源氏が末摘花に対する好奇心として用いている。諸本多く「しゃれっけたっぷりな今風の気取り屋よりは、こういう女の方がこの上なく奥ゆかしいとお思いになるが」と、「奥ゆかし」はそのまま今の意味の「奥ゆかしい」と訳されているがどうであろうか。恐らく「深い心づかいがあって慕わしい」という意味であると考えられる。「奥ゆかし」の「奥」は「深い心」を意味するものと思われる。

次は「野分」の巻である。

○いといたう心げさうしたまひて、源氏「宮に見えたてまつるは、恥づかしうこそあれ。何ばかりあらはなるゆゑゆゑしさも見えたまはぬ人の、奥ゆかしく心づかひせられたまふぞかし。いとおほどかに女しきものから、気色づきてぞおはするや」とて出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじき気色にてゐたまへるを、

この「野分」の巻では、「奥ゆかしく」と形容詞の連用形で表れ、光源氏が中宮（秋好中宮）の批評をしている言葉の中で、「どことといって目立った風情があるらしくもない方だが、何か奥深い心づかいがあって惹きつけられる」というのである。光源氏が中宮に対しての好奇心で、うきうきとした陽性心情が窺われる。

次は「橋姫」の巻にみられる。

○あやしく、夢語、巫女やうのものの問はず語りすらんやうにめづらかに思さるれど、あはれにおぼつかなく思しわたることの筋を聞こゆれば、いと奥ゆかしけれど、げに人目もしげし、さしぐみに、古物語にかかづらひて夜を明かしはてんも、こちごちしかるべければ、薫「そこはかと思ひわくことはなきものから、いにしへのことと聞きはべるも、……」

「橋姫」の巻では、「奥ゆかしけれ」と形容詞の巳然形で表れ、薫の聴覚的意識に対して用いている。

語義は「聞きたい」と語釈するのが最も文意にそぐう、薫は残りの話がもっと聞きたくお思いになるのである。本用語例中の「奥ゆかしけれ」は、「ゆかし」本来の意味、「聞きたい」「知りたい」という意味を包含しており、その意味で語釈すると文脈上文意に自然に適う。志向対象はここも人物ではなく残りの話を聞く事であり、あまり例をみないものに薫は好奇心を寄せている。

『源氏物語』中には、「奥ゆかし」という語は三例みられたが、先の二例は、「ゆかし」の本義から少し転じて、第二義的な意味で訳を付けないと、文脈上適合しない。勿論、「ゆかし」という言葉があって、これを基にして「おくゆかし」という新語が生まれるが、まだ、この長大な『源氏物語』に三語という僅少の数では活躍をみせず、「ゆかし」と意味内容の接点を保ちつつも、後世になっては

「ゆかし」と離れ別語となって活躍していく言葉であるといえる。

さて、ここで『源氏物語』における「ゆかし」についてまとめをしておく。

「桐壺」の巻から「夢浮橋」の巻まで全巻を通して、「ゆかし」関連の語はおよそ一三一語の多くを認め、その全用語例を抄出し、語義・好奇心・用法等をつぶさに検討吟味してきた結果、一番多く表れる巻は「若菜下」に九箇所、次いで「宿木」の巻に八箇所に、全然その語が表れない巻は、「空蟬」・「花宴」・「葵」・「花散里」・「蓬生」・「関屋」・「松風」・「初音」・「胡蝶」・「篝火」・「藤袴」・「真木柱」・「藤裏葉」・「鈴虫」であり、その他の巻には全般的に散見する。それは地の文にも会話の中にも和歌の中にもみられるが、会話文中に案外多くみられ、会話用語としてよく馴染んでいるように思える。「ゆかし」の思いを感興する当事者は総て人物であるが、全用例を探索してみると、その大半が男性の好奇心で、志向対象は女性に恋慕の情を抱いている場合が浮彫にみえる。これは当時の女性貴族の生活様式が隠された奥まった室内での生活であるところからくるものであろうか。こういうように男性貴族が女性貴族に志向する好奇心が多い他、対象となるものも広範囲に用いられ人物関係以外に、「前の世」・「書体」・「琴の音」・「景色」・「猫」・「文」・「残りの話」・「絵合」等に心惹かれる例が極わずかみられるが、基本的には「ゆかし」の心情は当事者も対象者も人物に対して用いるのが自然なようだ。そして庇護者的立場にある人が庇護下にある人に向けられた好奇心であるといえる。

また、「ゆかし」は本用語例から連用形で多く表れ、「思ふ」という心情語を下接させ相互に協調し合って願望意識を昂揚させ心を動かし、連体形においては、「心の底」・「静心」等、心の状態を表す語と共に用い心中を充満させているのである。

「ゆかし」の語義については、「見たい」・「読みたい」という視覚的願望の意味をなすものが圧倒的多数を占めているが、人物の感覚は視覚機能が一そうより強く発達しているところから、視覚が活発に活動をみせているのである。

「ゆかし」の語義で次に多いものは、「聞きたい」という聴覚的願望を意味するものである。特にその対象は「美しい琴の音色」・「男女の仲」・「残りの話」等である。

次には「知りたい」と語釈するのが文脈上適切である箇所も見当たる。

「ゆかし」を語釈するとこのように、「見たい」・「聞きたい」・「知りたい」となるのが中核的意味であるが、一三一の用語例を一例一例文脈に沿って考察した場合、この他の意味が存在する。それを挙げると、「興味がそそられる」・「良い」・「いとしい」・「慕わしく」・「奥ゆかしい」・「趣のある」・「感心」・「心惹かれる」・「関心をよせる」・「所望する」・「行きたく」・「楽しさ」・「魅力」・「欲しい」・「好奇心」・「深い心づかいがあって惹きつけられる」等があり、多くは陽性心情でうきうきとした落ち着かない場合に用いられるが、場面によっては不安定な陰性心情もみられる。しかし、このような意識の昂揚は場合によってはすぐに変動し、心情の起伏をみる箇所もあ

る。多くの用語例の中には、近親者同士の場合もみられるが、それは温情的心理が窺われる。

このような「ゆかし」という願望は、「未知のもの」・「珍しいもの」・「新鮮なもの」・「体験したことを再び体験したい」場合に用いるが、「前の世」のような現実化出来ないものにも用いている。これらの大方は近未来に実現出来そうな場合に用いる。

以上が「ゆかし」という感覚語の古語としての結果である。

（完）

注

（1）『源氏物語』の引用本文は以下全て、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。